

「東広島市音楽のまちづくり構想」が
東広島市の音楽文化に与えた影響に関する研究

広島大学教育学部第四類音楽文化系コース

畑山 洋平

序章

第1節 研究の目的と動機

我々を取り巻く音楽環境は、演奏家、鑑賞者、批評家など様々な人々によって構成されている。今日、音楽のジャンルはますます多様化し、インターネットによる配信をはじめとした音楽配信のメディアの劇的な発展をうけ、人々は自分の好きなジャンルの、好きな演奏家による、好きな曲の演奏を、自由に聴くことが可能となった。しかしその一方で、大阪の事例のように行政からのバックアップを絶たれ、存続の危機にあると言われる音楽団体もある。歴史的にみると、音楽文化を王侯貴族が保護していた時代から市民中心の時代となり、その市民の代表たる行政が文化芸術の保護・育成を行っていたが、徐々に市民としての感覚は薄れ、個人主義の時代になったことを背景に、大衆の関心を集めない、人間の生活に必要なでないものに行政が補助をする必要性がないと判断されるようになった、といえるであろう。このような時代にあって音楽家は、社会に必要とされる存在になること、言い換えれば、音楽を作曲したり演奏したりすることを職業とするプロフェッショナルとして、社会に貢献するということを改めて考え直さなければならない。現代は、人々の音楽への関心に変化し、行政において文化政策の見直しが行われ、音楽家の意識改革が必要とされる、音楽文化にとって転換期となるべき時代である、といえるのである。

そのような中であって、東広島市は平成21年に『東広島市音楽のまちづくり構想』というものを打ち出した。そのなかでは、音楽などの文化芸術を楽しむことで「交流の輪」をひろげること、音楽を次世代へ発展・継承させること、「音楽」を「酒」「学園都市」につづく東広島市のブランドとしてはぐくむことが基本理念とされ、(1)音楽を聴く人、演奏する人を増やす(2)音楽のまちづくりを推進する輪を広げていく(3)音楽を楽しむ環境を充実させる、という3つの視点で展開していくことが求められるとしている。

しかしながら、この街で生活し、音楽活動を行っていくなかで、演奏の機会が増えたという実感は少なく、また定期的に演奏会が開催されるというわけでもなく、音楽が市民の文化として定着しているかという点については、未だ疑問が残る状況である。

そこで本研究では、このような現状を分析し実態を把握したうえで、行政側の意図、聴衆側の要請、演奏者側の要請を明らかにすることを目的とする。本研究によって、「音楽のまちづくり」を掲げる東広島市において、音楽が市民の文化としてしっかり定着し、音楽が新たなブランドとなるためには今後どのような事業が行われていくことが望ましいのかという課題に示唆を得たい。そして、東広島市音楽のまちづくり構想にある、音楽は「人

間として生きるために不可欠なものであり、社会・経済発展のための創造性の源泉である」という言葉が美辞麗句で終わらず、我々音楽家が自らの専門とするところを十分に発揮して、地域社会に貢献していくことができるシステムを作るために寄与したい。

第2節 先行研究の検討

川口（2010）^{1）}らは、神奈川県川崎市における「音楽のまちづくり」の政策全体の効果を、公的サービスの受益者である市民を対象にしたスクリーニング付きランダムサンプリングによるインターネット調査の結果から定量的に推定することによって考察している。

川崎市は、2004年に市制80年を迎えたことを契機として、音楽による新たなまちづくりに取り組み始めた。川崎市内には、音楽教育・研究機関や、音楽活動団体が多数存在する。その多彩な音楽活動や資源を活かして、活力ある地域社会の実現や新たな産業機会の創出により、新しい都市のイメージの創造を目指すまちづくりの取り組みが川崎市の「音楽のまちづくり」である。2004年に発足した「音楽のまち・かわさき」推進協議会を中心に、市民や市内の音楽関係団体・音楽家・企業等と川崎市が協力して「音楽のまちづくり」の取り組みを進めている。この「音楽のまちづくり」の象徴として建設されたのが、「ミューザ川崎シンフォニーホール」である。

川口らは、インターネットを通じたアンケート調査を行った。その際用いた調査票の構成は、①調査対象者の個人特性に関する質問群、②調査対象者の個人属性に関する質問群、③ミューザ川崎シンフォニーホールに関する質問群、④ミューザ川崎シンフォニーホール以外の「音楽のまちづくり」に関する質問群、⑤「音楽のまちづくり」全体に関する質問群、に分類され、全36問の設問となっている。①個人特性に関する質問とは、文化芸術における興味・関心のある分野、音楽における興味・

関心のある分野、コンサートホールでの音楽鑑賞経験などに関する質問であり、その個人特性が「音楽のまちづくり」の認知度、利用経験、取り組みの効果等への評価に影響するかどうかを分析するために用いている。この調査から、取り組み開始から4年が経過した川崎市における「音楽のまちづくり」政策は、半数を超える認知度と、イメージアップなどの効果があったと市民に認められていることが明らかにされている。

第3節 研究方法

東広島市には、多くの演奏会場と、吹奏楽やオーケストラをはじめ多くの演奏団体や演奏家が存在する。そして様々なニーズを持った聴衆も存在し、それぞれが異なった意見や要望を持って1つの社会を形成している。そのような中で、東広島市は音楽のまちづくり構想を打ち出したのだが、これからの過程で市民の意見がどのような形で反映されるかが重要になってくる。そこで、東広島市による「東広島市音楽のまちづくり構想」が策定されたことによる市内の音楽活動の変化を、数値的データをもとに分析していくとともに、東広島市民がどういう音楽に対して興味・関心を持っているのか、演奏家はどのような演奏の機会を求めているのか、そして東広島市は音楽文化をどのように育てていきたいと意図しているのかを調査することにより、その理想的な帰着点を見つけていく。

第 1 章

「東広島市音楽のまちづくり構想」と市民ホール建設

第1節 東広島市の概要

東広島市は1974年4月20日、西条町、八本松町、志和町、高屋町の4町が合併し誕生した。その後約30年の間、「人間と自然の調和のとれた学園都市」を目指し、広島大学の移転を背景に進められた『賀茂学園都市建設』と、賀茂地域に先端技術産業の活力を導入し「産」・「学」・「住」の調和したまちづくりを目指す『広島中央テクノポリス建設』の2大プロジェクトによって社会基盤や産業基盤の整備を進め、2005年2月7日、黒瀬町、福富町、豊栄町、河内町及び安芸津町と合併し、現在の規模になった。東広島市は、広島県のほぼ中央に位置し、周辺圏域との連携が容易な立地条件を背景に、広島空港や山陽新幹線、山陽自動車道などの整備が進められ、2012年12月末の時点での東広島市の人口は78,200世帯183,733人、県の約7.5%を占める広いエリアを有する、広島県中央地域の中核都市である。まちづくりの基本となる新市建設計画では、新生東広島市の都市像を「未来にはばたく国際学術研究都市」と定めており、新市の多彩な個性を活かしたまちづくりを推進するための基本目標として、「豊かな自然環境・文化・歴史を活かしたまちづくり」、「国際・学術・技術・研究機能を活かしたまちづくり」、「県央の交通拠点性を活かしたまちづくり」を掲げ、住民福祉の向上はもとより、新市の一体性の速やかな確立と均衡ある発展を図ることを目的とし、政策が進められている。

第2節 「東広島市音楽のまちづくり構想」

1. 概要

東広島市では、平成20年5月に市内にある広島大学、エリザベト音楽大学、広島国際大学、近畿大学の4大学と「東広島市と大学との連携に関する協定」を締結したことを契機に、大学や学生と市民の交流・連携を一層深めていくための取り組みのひとつとして、「音楽」をはじめとした文化芸術をテーマにまちづくりをすすめるため、東広島市音楽のまちづくり構想検討委員会（委員長：岸田正之氏）を設置し、その指針となる音楽のまちづくり構想を平成21年10月に策定した。

この構想を踏まえ、東広島市の音楽文化の振興を図るため、各種事業に取り組むとともに、平成26年度の完成を目指す市民ホールへの機運の醸成を図るなど、文化芸術を基軸としたまちづくりを進めようとしている。

2. 基本理念

- 音楽をはじめとした文化芸術を楽しむことで人と人との出会い、交流の輪が広がるまちづくりを進める。
- 音楽をはじめとした文化芸術を尊重し、次世代への発展・継承を進める。
- 「音楽」を「酒」、「学園都市」につづく東広島市のブランド（誇り）として育むまちづくりを進める。

3. 音楽のまちづくりの展開

- 音楽を聴く人、演奏する人を増やす
- 音楽のまちづくりを推進する輪を広げていく
- 音楽を楽しむ環境を充実させる

第 3 節 市民ホールの建設

東広島市では、市民のライフスタイルの変化や余暇時間の増大を背景に、市民の生活意識や価値観などが多様化するとともに、市民の文化芸術への関心が高まり、身近で質の高い優れた文化芸術を鑑賞する機会や、自らも幅広い文化芸術活動に参加し、活動の成果を発表する場が求められている。これを背景に、市民の文化芸術や交流活動を活性化する中核拠点として、地域文化を創造・発信していく市民ホールの建設計画が行われている。東広島市には、市の中心部に中央生涯学習センターが存在するが、施設・設備の老朽化に加え、バリアフリー化や耐震化への対応が求められるようになったが、これには大規模な改修が必要である。またこのセンターは、音響性能が十分でなく、高度化する文化芸術に対するニーズに対応することが困難になっているため、文化芸術公演の会場として利用されることが少なくなっており、観客となる市民が質の高い舞台芸術に触れる機会が少なくなっていることも、新たな市民ホール建設の背景となっているⁱⁱ。

平成 22 年 11 月に策定された「東広島市市民ホール建設基本計画」ⁱⁱⁱによると、東広島市は新たな市民ホールの基本理念を「ふれる」「そだてる」「つくる」「つなげる」とし、その上位理念として“ひと・まち・文化をむすび 芸術を育む 感動と共感の舞台”を掲げている。「ふれる」とは、多彩で質の高い文化芸術を身近に鑑賞する機会を求める声の高まりに応え、豊かな地域文化を創造するため、豊かな文化にふれる窓口になることを示す。「そだてる」とは、地域文化を市民と共に支え育てること、文化芸術活動を実際に行う人材や、その活動を理解し支援する人を育てていくことを示す。「つくる」とは、地域独自の新たな文化芸術を創造することを示す。「つなげる」とは、文化芸術を介在させた新しいコミ

ユニティを形成し、人・世代・活動・地域を結びつけることを示す。そのうえで、新たな市民ホールの目指すところとして、「文化芸術を基軸にした街づくりの拠点施設として計画するとともに、近隣に位置する新庁舎や西条中央公園、中央公民館、JR 西条駅、酒蔵通り、西条駅前商店街など中心市街地一帯のまちづくりの中核施設となること」をあげ、「県央に位置する東広島市の立地条件を活かし、東広島市だけでなく広く周辺地域に開いた施設として」いくと明言している。

以上のような理念と計画により、面積 5,569.39 m²の土地を建設予定地とし、総工費 60 億円程度をかけて平成 27 年度の開館に向けて建設することが計画されている。

この市民ホールの建設計画は、東広島市の生涯学習課が管轄しており、「東広島市音楽のまちづくり構想」とも深く関わりを持つ事業であるともみることができる。

第 2 章

市民調査と東広島市の音楽文化の実態

本章では、東広島市民を対象に行ったアンケート調査を分析し、聴衆としての市民・演奏家としての市民それぞれが持つ東広島市の音楽文化に対して持っている考えと意見を考察するとともに、「東広島市音楽のまちづくり構想」が策定される前後で東広島市における音楽文化にどのような変化があったのか、数値データをもとに検証していく。

第 1 節 市民調査の分析

(1) 市民への調査

東広島市民が、市内の音楽文化の現状についてどのような認識を持っているのかを調査するため、調査票によるアンケート調査を行った。調査票の内容は、①年齢や居住地など個人属性に関わるもの、②「東広島市音楽のまちづくり構想」や「市民ホールの建設」など、東広島市が進める音楽文化支援事業に関する認知度に関わるもの、③東広島市の音楽文化に対する認識に関するもの、④個人の興味や市への期待に関するもの、に分類され、全 10 問の設問となっている。

この調査は、平成 24 年 12 月 16 日にサタケメモリアルホールにて行われた広島大学交響楽団の第 61 回定期演奏会の会場において、東広島市在住の鑑賞者に調査票を配布し実施したものと、東広島市で活動する演奏団体 3 団体の団員に対して実施したものである。前述したように東広島市は 9 つの地域からなるが、今回は全調査を西条地域内にて行ったため回答者の居住地には偏りがある。また、回答者には広島大学の関係者が多かったため、年齢層にも偏りがある。

このため、この調査によって得られた結果は西条地域内でのみ有効なものと考え、考察に反映する。サンプル数は 147 である。

1. 「東広島市音楽のまちづくり構想」の認知度

まず、「東広島市音楽のまちづくり構想」そのものの認知度について調査したところ、知っているという回答は全体の3割にも満たなかった。サンプル数に偏りがあるため断言はできないが、10代や20代の若い世代にあまり認知されておらず、30代や40代にはある程度認識されているという結果であった。

表 1 「東広島市音楽のまちづくり構想」の認知度

『東広島市音楽のまちづくり構想』の	年齢						総計
	10歳代以下	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代以上	
知っている	3	9	11	10	1	5	39
	9%	15%	58%	71%	17%	63%	27%
知らない	30	53	8	4	5	3	103
	91%	85%	42%	29%	83%	38%	73%
総計	33	62	19	14	6	8	142

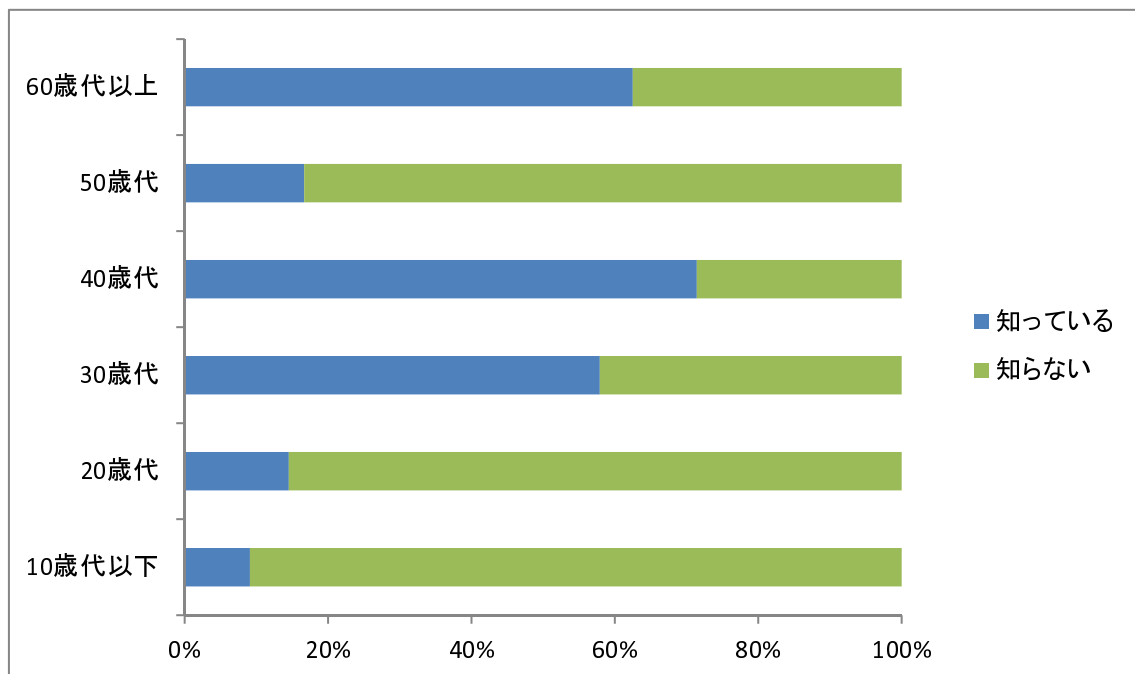


図 1 「東広島市音楽のまちづくり構想」の認知度

2. 市民ホール建設に関する認知度

次に、市民ホール建設に関する認知度について調査したところ、知っていると回答した者がどの年代も過半数を超え、市民ホールの建設が予定されているということはよく知られていることがわかった。これは、現在建設予定地になっている場所に大々的に掲示してあることが大きな要因になっていると考えられる。

表 2 市民ホール建設の認知度

市民ホール建設の 認知度	年齢						総計
	10歳代以下	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代以上	
知っている	22	44	15	13	3	9	106
	67%	69%	79%	93%	50%	100%	73%
知らない	11	20	4	1	3	0	39
	33%	31%	21%	7%	50%	0%	27%
総計	33	64	19	14	6	9	145

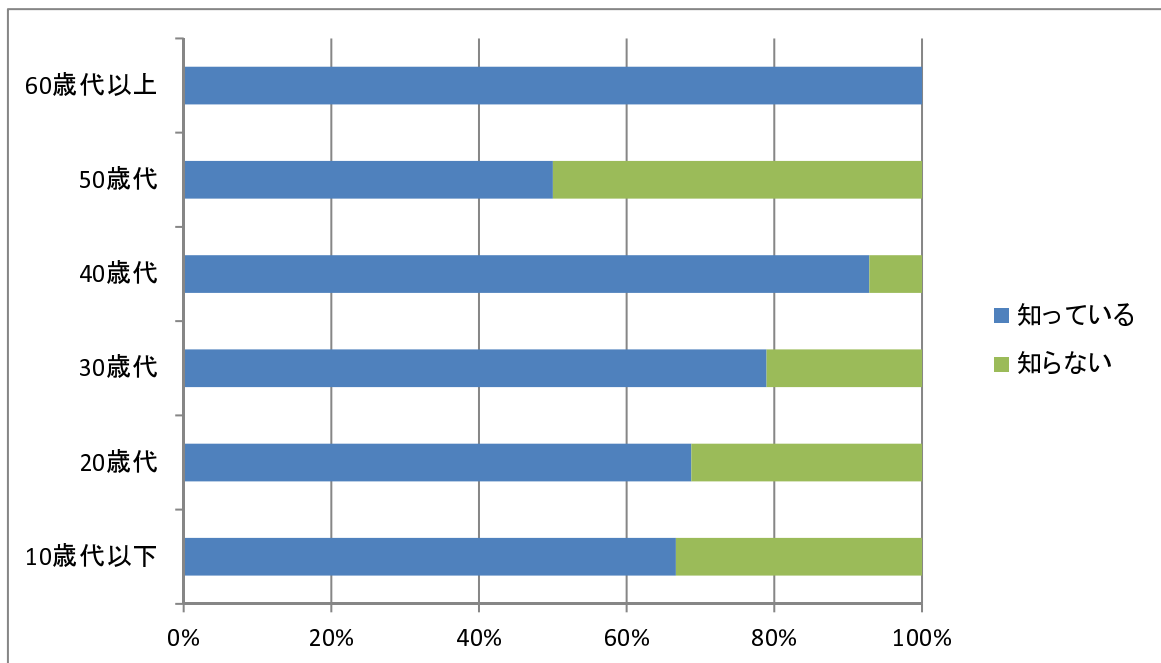


図 2 市民ホール建設の認知度

3. 東広島市における音楽文化に対する実感

次に、東広島市における音楽文化に対する実感について調査した。具体的な質問項目は、「ここ数年で、東広島市における音楽活動は盛んになったと思いますか？」である。

表 3 東広島市の音楽文化に対する実感

東広島市の音楽文化に対する実感	年齢						総計
	10歳代以下	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代以上	
盛んになった	5 15%	21 33%	9 47%	6 43%	1 17%	5 56%	47 32%
盛んになってはいない	1 3%	4 6%	4 21%	3 21%	0 0%	0 0%	12 8%
どちらともいえない	27 82%	39 61%	6 32%	5 36%	5 83%	4 44%	86 59%
総計	33	64	19	14	6	9	145

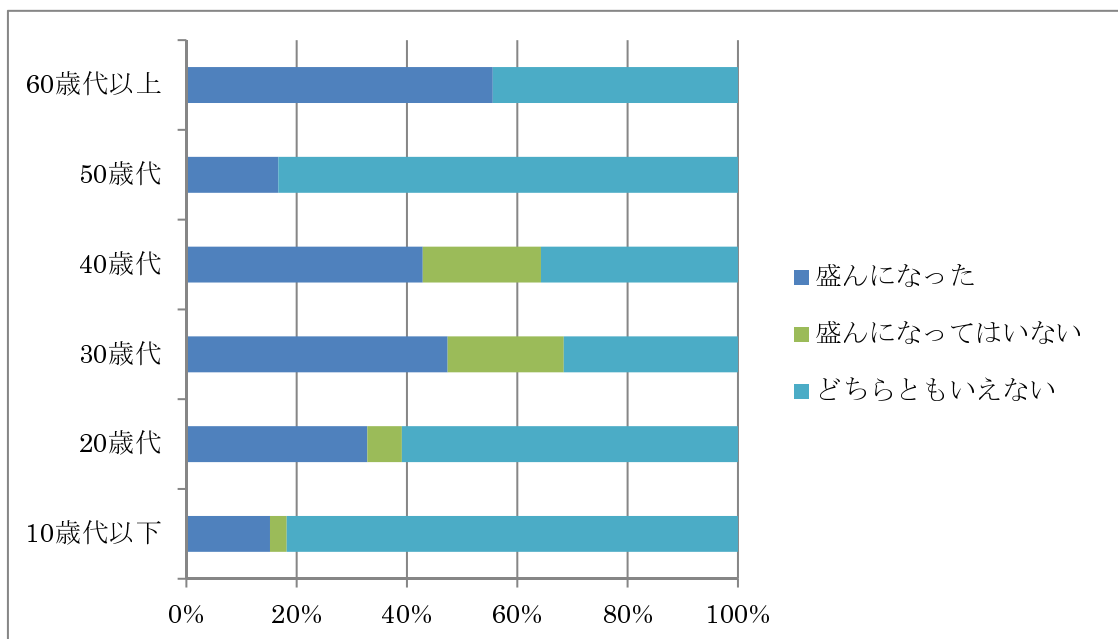


図 3-1 東広島市の音楽文化に対する実感（年齢別）

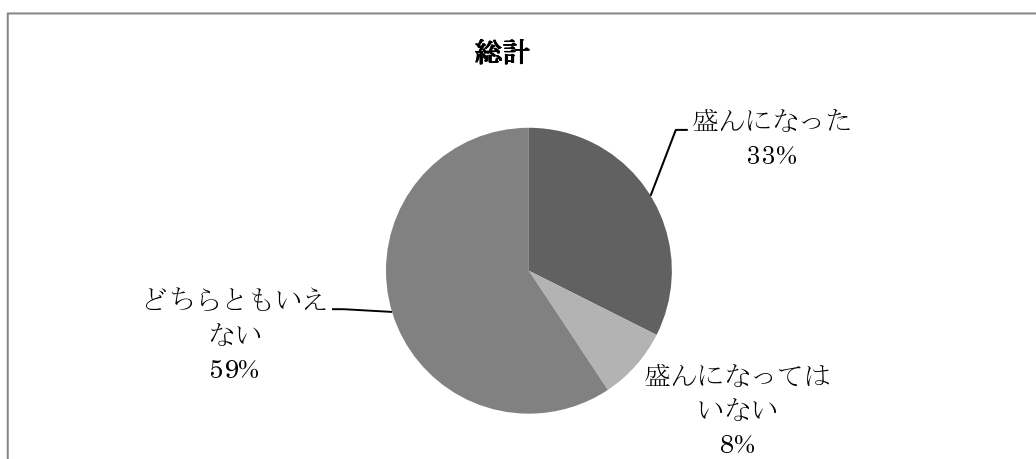


図 3-2 東広島市の音楽文化に対する実感（総計）

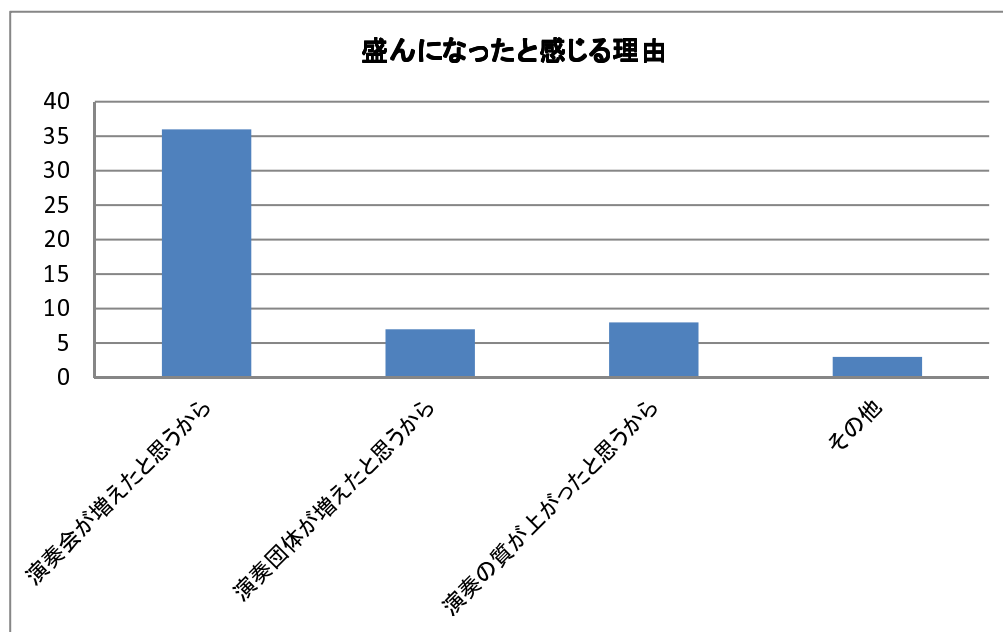


図 4 東広島市における音楽文化が盛んになったと感じる理由

大学生などで東広島市に住み始めて間もない人も多いため、「どちらともいえない」という回答が多かったものの、「盛んになった」という回答はほとんどの年代で過半数に及ばなかった。しかし、「盛んになってはいない」と答える人は少数であるため、まったく盛んになった実感がないというわけではないと推測できる。

4. 個人の関心

東広島市に住む市民の、音楽への関心をジャンル別に調査するため、「あなたが聴いてみたいと思う演奏会（コンサート・ライブ等）をお聞かせください。（複数回答可）」という質問を行った。ジャンルの分け方には様々な方法が考えられるが、今回は演奏の形態をもとに分類を行った。「その他」の回答には、オペラ・ミュージカル、現代音楽などが挙げられた。調査を行った演奏会がオーケストラであったこと、また調査を行った団体が吹奏楽団と交響楽団だったことも、この結果に影響しているものと思われる。

表 4 聴いてみたいと思う演奏会

Q8.あなたが聴いてみたいと思う演奏会をお聞かせください。	回答数
オーケストラ	116
吹奏楽	98
アンサンブル	91
ソロ・リサイタル	57
邦楽	30
ジャズ	59
ポップス	50
その他	9

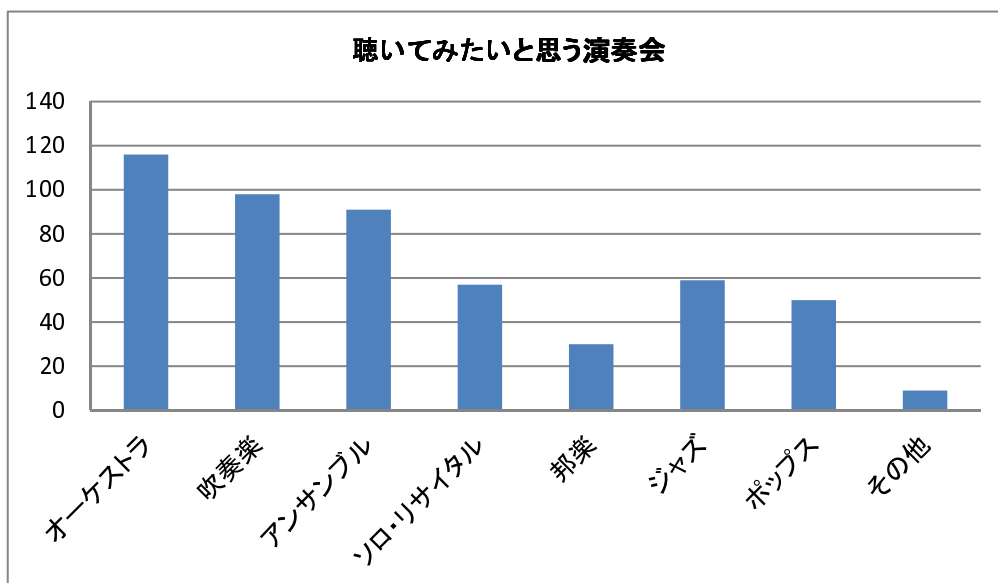


図 5 聴いてみたいと思う演奏会

また、「今後の東広島市の音楽文化にいて、盛んになってほしい分野は何ですか？（複数回答可）」という質問に関しては以下のような結果になった。音楽祭のような単発のイベントではなく、プロの演奏家の演奏をホールで鑑賞する事業や、市民演奏団体の隆盛に期待が多く集まっていることが見て取れる。

表 5 盛んになってほしい分野

Q9:今後の東広島市の音楽文化において、盛んになってほしい分野は何ですか？	回答数
市民オーケストラ	70
市民吹奏楽団	67
市民参加型音楽祭	42
外部演奏家招聘型音楽祭	45
青少年の育成事業	42
プロの演奏家の招聘事業	74
地元アーティストの演奏	22
その他	3

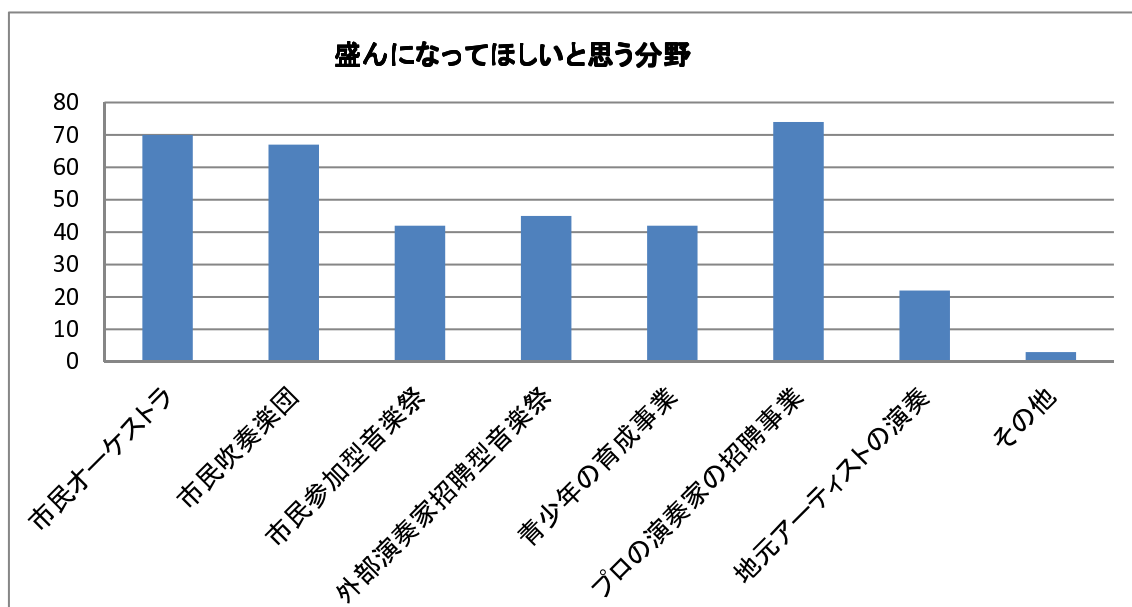


図 6 盛んになってほしい分野

5. 考察

以上の調査結果から、東広島市が「東広島市音楽のまちづくり構想」を掲げ、音楽によるまちづくりを進めていこうとしているということは、あまり知られていないということが明らかとなった。それに対し、市民ホールの建設はよく知られており、期待も大きく、「市民ホールの早期開館を」などの意見も多く見られた。また、演奏会が増えたと感じるため、東広島市の音楽活動が盛んになってきていると感じている人も多く存在した。このことは、音楽のまちづくりにおける大きな進歩であるといえる。

問題点としては、市民ホールなどの建設はよく知られている反面、「音楽のまちづくり構想」に関してはあまりよく知られていないという実態である。市民全体で音楽によるまちづくりを進めていこうという機運の醸成がなければ、その他のホールと同様、多くの市民にとって必要でなく、演奏の会場としてその設備を十分に生かすことができない施設になる危険性があると考えられる。

（２）演奏者への調査

東広島市には、鑑賞するのみならず、演奏者として活動している市民も多い。広島大学の課外活動団体や市民吹奏楽団などの大きな団体に所属していたり、各種音楽教室などで生涯学習の一環として活動していたり、その活動の仕方はさまざまである。そこでそれらの市民に、演奏をする側の立場として「東広島市音楽のまちづくり構想」におけるまちづくりの展開がどの程度達成されているか、その実感と実際のデータを聞き取る調査を行った。

質問は、①所属に関するもの、②『東広島市音楽のまちづくり構想』における〈音楽のまちづくりの展開〉の３点に関するもの、③演奏者としてこれからの政策に期待すること・要望、に分類され、全 11 問の設問となっている。

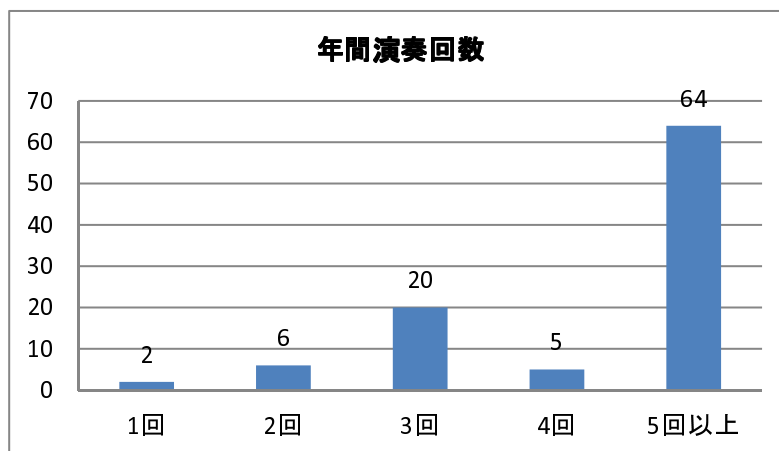
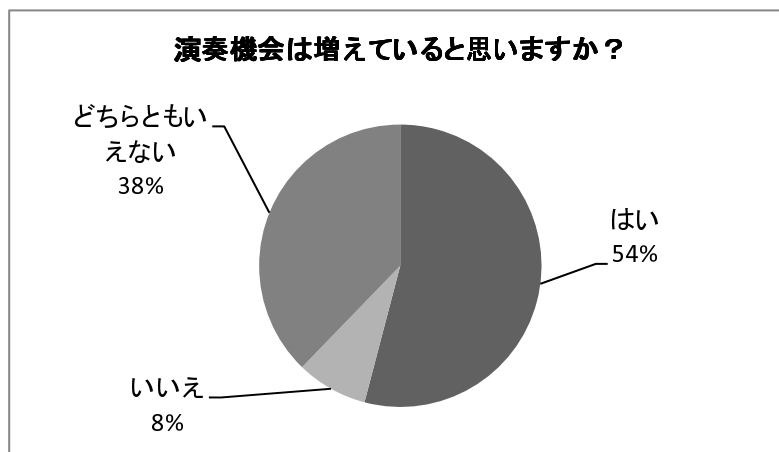
なお、このアンケートは広島大学交響楽団、広島大学吹奏楽団、東広島ウィンドアンサンブルの３団体に協力を依頼した。

1. 「音楽を聴く人、演奏する人を増やす」について

音楽のまちづくりの展開のひとつである上記に関連して、自分たちが演奏する機会が増えてきているという実感があるかについてと、一年間に東広島市内で演奏する回数を調査した。その結果、過半数が「増えてきている」と回答した。団体によって差はあるものの、ほぼ半数が演奏の機会が増えていることを実感している。また、1年間の市内での演奏回数は、5回以上という回答が最も多かった。

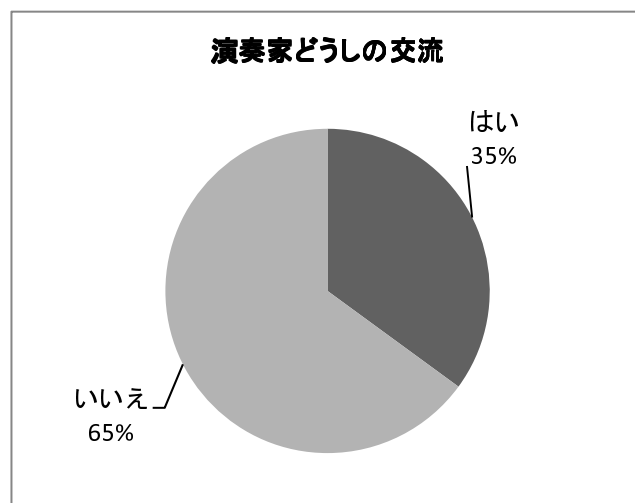
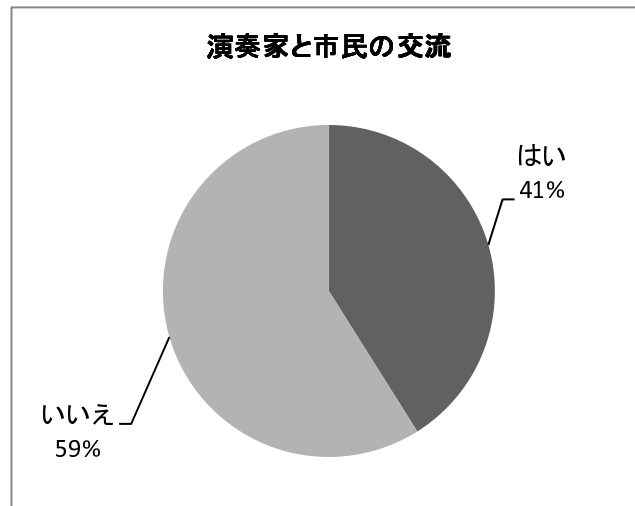
表 6 演奏機会増加の実感

Q2.自分たちが演奏する機会は増えてきていると思いますか？	
はい	53
いいえ	8
どちらともいえない	37



2. 「音楽のまちづくりを推進する輪を広げていく」について

音楽を楽しむことで人と人が出会い、交流の輪が広がること、また市民やアーティストの交流を推進し、ネットワークを構築することが、音楽のまちづくりの基本理念のひとつであり、展開にあたっての視点のひとつである。これに関して、「演奏家と市民の交流はよく行われていると思いますか？」「演奏家どうしの交流はよく行われていると思いますか？」というふたつの質問を行った。その結果どちらも「いいえ」の回答が多く、特に演奏者同士の交流が少ないと感じている人が多いという結果になった。

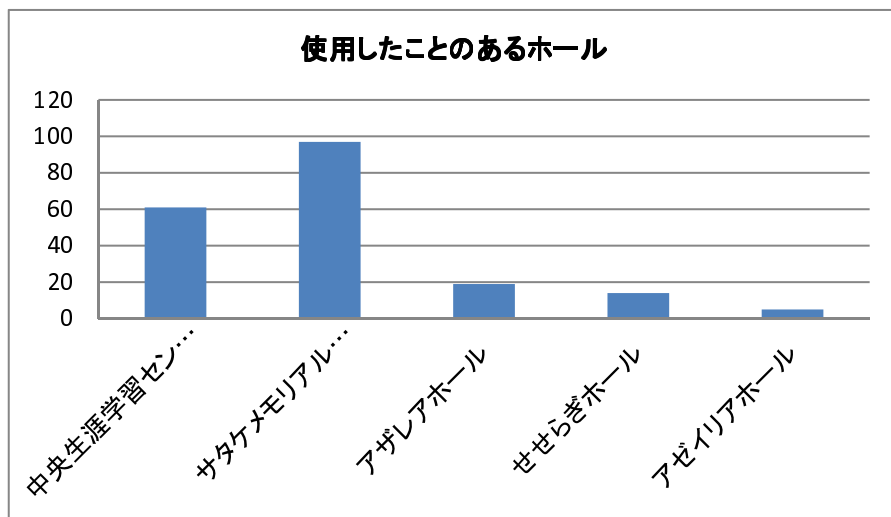


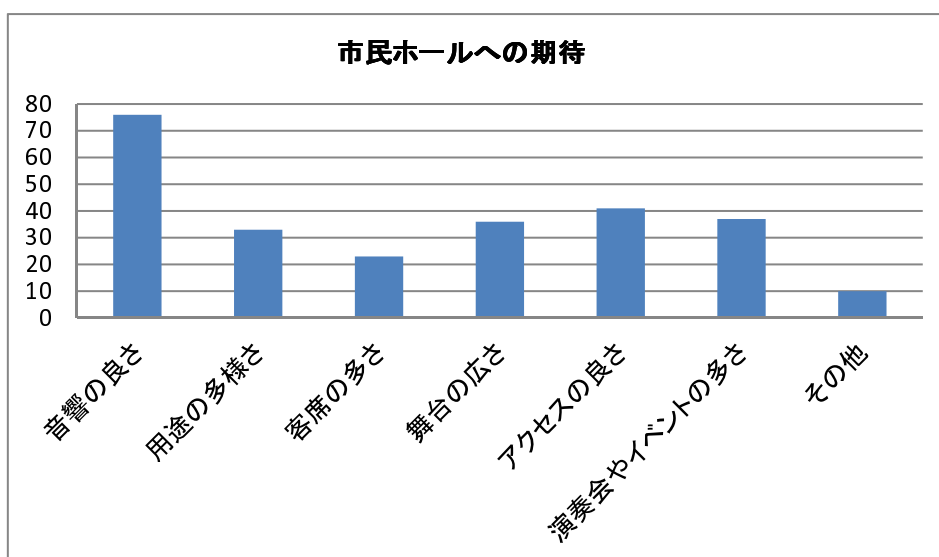
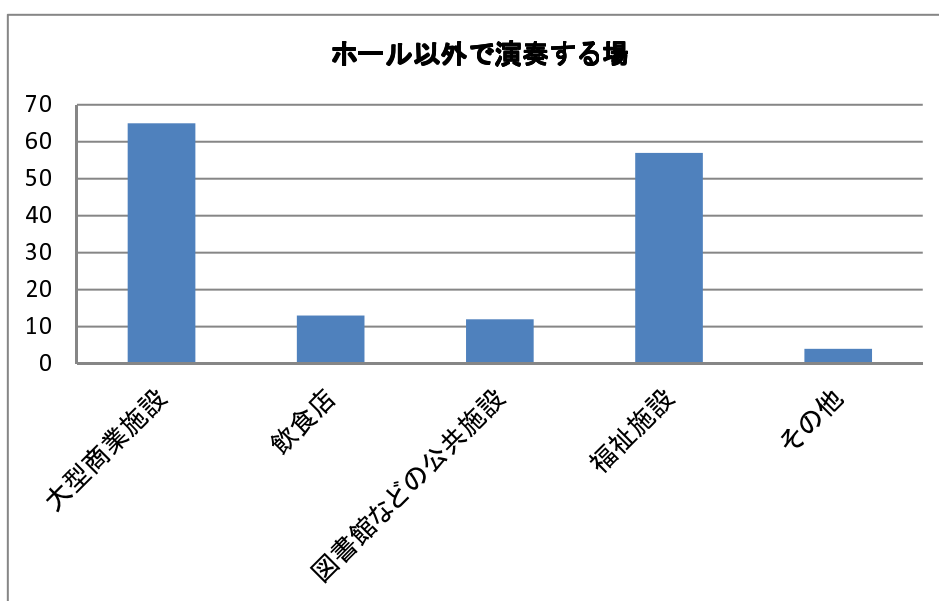
3. 「音楽を楽しむ環境を充実させる」に関して

「音楽を楽しむ環境」とは、公共施設・民間施設等を指し、それら既存の施設の利用を活性化させること、また、拠点となる新たな文化施設の整備として、市民ホールの建設計画も含まれている。これに関して、東広島市に存在する、中央生涯学習センター、サタケメモリアルホール、アザレアホール、せせらぎホール、アゼイリアホールの5つの施設のうち、利用したことのある施設を調査した。その結果、最も新しく客席数も多い、広島大学内サタケメモリアルホールが最も多いという結果になった。ついで、ひがしひろしま音楽祭が開催される中央生涯学習センターが挙げられている。

また、ホール以外の場所で演奏することのある場所として最も多かったのが、大型商業施設、ついで福祉施設となっている。大型商業施設に関しては、街頭コンサートなどのかたちで、ホールで行う演奏会の宣伝を兼ねて演奏することが多いため、このような結果になったと考えられる。

なお、建設予定の市民ホールに最も期待するものは音響であった。





4. やりがいに関する質問

東広島市内で演奏することに対してやりがいを感じるか、また、東広島市内で演奏する機会を増やしたいか、ということに関して質問を行ったところ、ほぼ全員にあたる 98%がやりがいを感じるということであった。また、やりがいは感じるが増やしたくはないという意見も少数ではあったが存在した。

5. 考察

演奏機会が増えてきていると感じるのは、音楽のまちづくりをはじめとした政策が関係するものなのか、それともその団体の知名度が高くなったことによるものなのか、この調査だけで把握することはできない。また、自分が演奏者として演奏会を企画し、演奏をする側としては、音楽を聴く人が増えたという実感はあまりないのが事実である。しかしながら、観光協会を中心として行われている酒蔵でのコンサートや各店舗で行われる演奏、中央生涯学習センターで毎月1回昼間に開かれているロビーコンサートなど、ホール以外の場所でのコンサートが増えてきているという実感はある。演奏会の機会が増えればおのずから演奏者と市民の交流は行われるのだが、演奏者どうしの交流となると、あまりそのような場が少ないのが今後の課題である。さまざまな団体が一堂に会するひがしひろしま音楽祭のようなイベントで交流をもつなど、工夫が必要と思われる。また、東広島市内のホールは実質的にサタケメモリアルホール以外には演奏にほとんど使われていないのが現状で、それには使用料の問題、音響の問題、アクセスの問題など、様々な要因が考えられる。しかし、この状況を打破し、それぞれのホールの利用を活性化するには、演奏者が使いたいと思う魅力が必要なのではないだろうか。

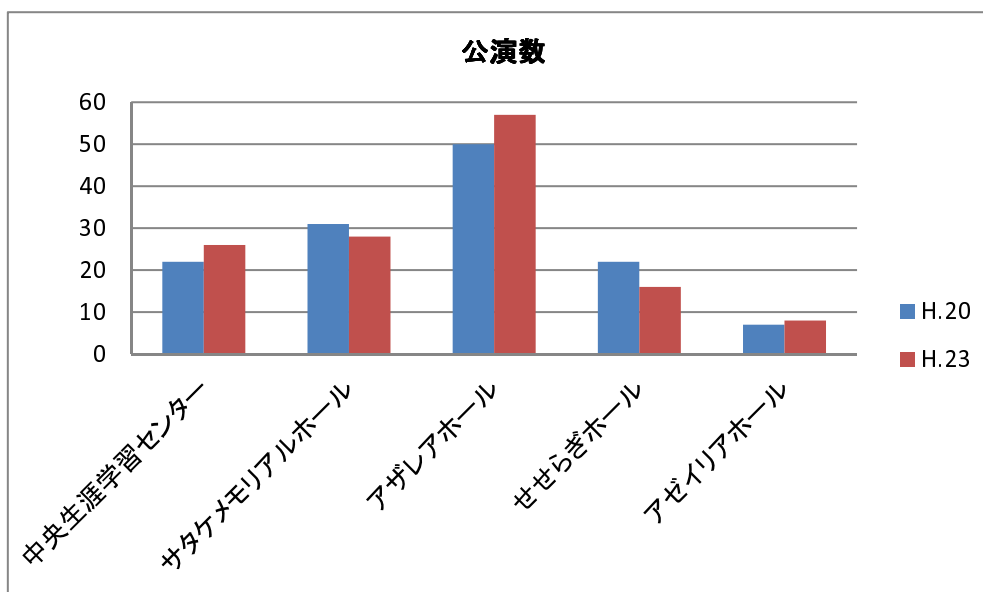
東広島市には多くの演奏家が住んでおり、市内での演奏にやりがいを感じながら活動している。「演奏の依頼をしてほしい」などの意見もあった。このような団体・演奏家の演奏を個人の趣味にとどめておくのではなく、市の政策や音楽のまちづくりに積極的に参加してもらえよう働きかけ、市民総出でまちづくりを推進する仕組みの構築が必要である。

第 2 節 数値データを基にした東広島市における音楽文化の実態

平成 21 年に「東広島市音楽のまちづくり構想」が策定されてからおよそ 3 年が経過した今、この構想がどのような成果を出してきたのかを検証する必要がある。そのため本研究では、東広島市内に存在する主要な 5 つのホール施設で行われた音楽に関わる催物の件数を、平成 20 年度と平成 23 年度で比較することによって調査した。

現在東広島市には 33 の地域センターと 5 件の生涯学習センター、1 件の文化センター、そして 1 件のホールが存在する。しかし地域センターはもともと「公民館」として使用されており、体育館のような形や小規模なものが多く、音楽用として作られたものは見受けられない。したがって本研究では、平成 22 年度まで「文化センター」として使用され、音楽の演奏会も視野に入れて建設されたと考えられる黒瀬生涯学習センター（せせらぎホール）、豊栄生涯学習センター（アゼイリアホール）、市の中心に位置し市内最大級の規模を持つ広島市中央生涯学習センター、財団法人東広島市教育文化振興事業団が管理・運営を行い、反響版などの音響設備も備えている東広島市市民文化センター（アザレアホール）、2003 年に完成した東広島市内では最も新しいホールであり、現在最も多くの音楽団体によって使用されている広島大学内サタケメモリアルホールの 5 件を対象に調査を行った。各施設によって情報の開示内容に差があったため、集計は数のみで行っている。ただしこの数値データには、「舞踊」や「カラオケ大会」など、音楽に関わる催物としての使用といえるか否かのグレーゾーンのようなものも含まれるため、参考としてのデータにすぎない。

公演数	中央生涯学習センター	サタケメモリアルホール	アザレアホール	せせらぎホール	アゼイリアホール
H.20	22	31	50	22	7
H.23	26	28	57	16	8



上の表やグラフが示しているように、音楽のまちづくり構想が策定される前後で、大きな公演数の増加や減少は見られない。これは市内の演奏家やその他市民に対して行った調査と相対する内容にも見えるが、演奏会が行われるのはホールだけではないため、これらの関連性はない。実際に、この数年間で行われた演奏会は、酒蔵や大学内の施設など、今までに使われなかった場所を使ったものも多い。しかし、公演の内容に関しては、西条地区にあるホールにて行われるものと、黒瀬や豊栄の生涯学習センターにて行われるものでは、大きな格差が見受けられた。

2012年に公布された「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」の趣旨においても、「我が国の劇場や音楽堂、文化会館、文化ホール等」の現状として、「我が国における劇場、音楽堂等としての機能を有している施設の多くは、文化会館や文化ホールといった文化施設であり、また多目的

に利用される場合が多い。」「これらの文化施設における文化芸術活動は、多くの場合は、貸館公演が中心となっている。」とし、「文化施設の劇場、音楽堂等としての機能が十分に発揮でされていない」ことや、「実演芸術団体の活動拠点が大都市圏に集中しており、相対的に地方では多彩な実演芸術に触れる機会が少ない」ことを課題として挙げており⁵⁾、東広島市における文化施設の状況と合致している。

第 3 節 考察

東広島市民への調査から、「東広島市音楽のまちづくり構想」の認知度が低く、その一環ともいうべき市民ホール建設が独り歩きをしているような状況があることがわかった。「音楽のまちづくり構想」は市民ホール建設への機運の醸成を図るための手段ではなく、東広島市という街を音楽によって市民が心豊かな生活を過ごすことができる街にすることを目的にしているはずである。そのことを改めて見直し、音楽の溢れる街を目指してそれぞれが音楽活動をこの街で行っていくことが望まれる。

また、公共ホールの公演数を見ても明らかなように、音楽のまちづくりは足踏み状態である。このことに問題意識を持ち、改革していく気概が必要不可欠である。

第 3 章

総括

東広島市が2009年に策定した「東広島市音楽のまちづくり構想」は、市の文化政策の進むべき方向を示した大変意義のあるものであった。しかし、その策定から3年が経過したいま、改めてその理念や展開の道筋を顧み、市の現状を見直すと、達成されているものは少ないと言わざるを得ない。音楽のまちづくりが進まない理由のひとつは、具体的な方針がこの構想に記されていないことにある。

まず、音楽を聴く人、演奏する人を増やすためには何が必要か。それは演奏会である。定期的に行われる魅力的な公演が音楽に親しみを持った人を増やすためには重要な要素になるだろう。魅力的な公演とは、質の高い公演を指すが、その答えはひとつではない。プロの演奏家の演奏会だけでなく、市民が作り上げる演奏会も、いい公演になる可能性を持っている。重要なことは、そのような社会的役割意識を持った演奏家が演奏しやすい環境を作ることである。

また、音楽のまちづくりを推進する輪を広げていくために、「楽友協会」のシステムを提案する。それは、音楽家どうしのネットワークを作成し、より自由で活発な音楽活動を可能にすると同時に、そこから演奏会などの情報を発信していくことによって、市民と音楽家とのコミュニケーションを図ることも期待できるものである。

そして、音楽を楽しむ環境を充実させるためには、今あるホールなどの施設をさらに活用する工夫が必要である。第2章の分析では、公共ホールの公演数はほとんど変化がなく、減少しているところさえあるという結果がでた。しかし演奏の機会は増えているというアンケート調査の結果もある。それはすなわち、ホール以外の場所での公演が増えているということを意味する。単純に、公演が少ない施設は公演を増やす努力をすることが求められる。ひとつの案としては、文化施設専属の楽団、演奏家を起用することである。これにより定期的な公演が可能となり、

演奏家の側も社会的役割が見出せる。社会に向かって演奏会を行う演奏家でなければ、音楽を聴く人を増やすことはできない。

音楽文化のあり方が問われる今、音楽のまちづくりを行うことは、社会全体にとって大きな意味を持っている。このまちづくりには、音楽家、行政、そして市民が一丸となって取り組むことが必要である。酒の街でもあり国際学術研究都市でもある東広島市には、多くの人材が生活している。その力を余すところなく発揮できるような社会の構造をつくることが、東広島市の課題であると考える。

本論文が、音楽の溢れる街東広島に向けて、少しでも推進力となれば幸いである。また微力ながら、様々な方面から音楽のまちづくりに助力する所存である。

謝辞

本校作成に当たり、東広島市内の各生涯学習センターの職員様、観光協会様、教育文化振興事業団徳永様、ほか多数の皆様に、資料提供など様々な面でお世話になりました。また、広島大学交響楽団、広島大学吹奏楽団、東広島ウィンドアンサンブルの皆さんには、練習の合間を縫ってアンケート調査にご協力いただきました。深い感謝の意を込めてここに記します。

ⁱ 川口夏織、垣内恵美子、角美弥子、小川由美子／政策研究大学院大学「川崎市における「音楽のまちづくり」—市民調査の分析から—」『音楽芸術マネジメント』第2号、2010、pp85-98

ⁱⁱ 東広島市企画振興部企画課「東広島市市民ホール建設基本構想」平成22年

ⁱⁱⁱ 東広島市企画振興部企画課「東広島市市民ホール建設基本計画」平成22年

<参考文献等>

- ・ 根木昭『文化政策学入門』水曜社、2010。
- ・ 松本茂章『官民協働の文化政策 人材・資金・場』水曜社、2011。
- ・ 山田真一『アーツマーケティング入門 芸術市場の戦略をデザインする』水曜社、2008。
- ・ 東広島市ホームページ
<http://www.city.higashihiroshima.hiroshima.jp/>
- ・ 財団法人東広島市教育文化振興事業団ホームページ
<http://www.hhface.org/index.html>
- ・ 社団法人東広島市観光協会ホームページ
<http://www.hh-kanko.ne.jp/>